

## 空席の灯

私も年をとった。ボツボツ人生の幕引きが始まっているような気がするこの頃である。当然のことながら人間の体は、そういつまでも長持ちするものではない。六十年、七十年と使っていると、そろそろ耐用年数が近付き、どこかにガタが生じてくることは避けがたい。

戦後五十年、人それぞれに過去が遠ざかりつつある。戦争が終わったのは一九四五年だから、今年は満五十年ということになる。だが仏教のしきたりに従うと、あの年に亡くなった人の五十回忌は昨年で、各地で供養が行われた。

終戦後の苦難の暮しは、今やはるか過去のこととなったが、同じ世代なら誰もが味わった強烈な体験であり、その後の人生に少なからず影響を与えたことは、私だけに限らないだろう。最も貧しい辛い時代だったはずなのに、不思議に一面では懐かしい思い出として残っている。戦争と敗戦を境に生き方を狂わせてしまった人は多数存在した。これから世の中はどういうことになるのか、全く見通しが立たなかった。歴史家でも政治学者でもない平凡な田舎暮らしの私には、あの戦争を検証することなどできない。ただ戦争が始まった経緯や、指導者たちとは関係なく、あたらかけがえない命を捨てた多くの兵士たちを犬死扱いにしないことを願う気持ちでいっぱいである。

現在の社会が、戦争という時代を生きなければならなかった無数の人々の犠牲の上に成り立っていることに、改めて思いを馳せてみるのも必要ではないだろうか。

現在の指導者が、外国にばかり気をつかい祖国のために血を流して犠牲になった人々に対する配慮が欠けているのではないか、と思うことしばしばである。

戦争とは悲惨なもので、戦後五十年たつてもなお、終わりはしないものだどつくづく思う。

空の色が濃くなり、赤トンボが飛び交う九月、水郷柳川に戦友たちが集った。展望温泉でゆつくりと休養をとり雑談の後、宴会場に入った。すぐ目についたのは、海外より輸入した洋蘭を主体にした豪華な花を飾った中に、特大のローソクを点した一つの席であった。料理も特別なもので、私は目を見張った。誰かを招待したのだろうかと思った。その夜の世話役である病院長のMが静かに挨拶を始めた。

「生き残った私たちの仲間も次々とあの世へ旅立って、寂しい思いです。私のようなつまらん人間がこうして元気でいて、心やさしい人たちが早く去って逝きます。あの空席は当地出身の今は亡き不運な生涯だったS君の席です。だれの身にも死はひとしく訪れるものですが、S君はあまりにも早すぎました。彼のために何かをしたいという思いはあったのですが、戦後の生きることの忙しさに追われ、何にもしてやれませんでした。医者という立場にありながら、彼の生存中一度も訪れなかった私、S君ごめんなさい……」と言って声をつまらせ、後は言葉にならなかつた。真情を込めたMの言葉が会場に流れた瞬間、私たちは感動の渦に包みこまれていった。

Mの言葉は、私を一気に五十年前に引き戻した。戦地から帰国してみると敗戦というものがいかに惨め

なものか、想像をはるかに超えた故国の状況であった。戦禍に打ちのめされた人たちがまたにあふれていた。復員の日、私とSは朝暗いうちに起きて、炊事係と交渉し、せつせと特大のにぎり飯を幾つもこしらえ門司港駅へ向かった。

待合室に入ると苛烈を極めた戦争によるひどい生活苦を感じさせる人々が多く見られた。朝食をすませているなかったSが、まわりを気にしながらにぎり飯を取り出した。すると五歳と三歳ぐらいの顔はすすけて、服はボロボロの明らかに被災孤児と思われる少女が近よって来た。二人は黙ってSの前に手を差し出し頂戴をした。彼は驚いて食べるのを止め、にぎり飯を渡した。少女は笑を浮かべコクンと頭を下げた。Sはやさしく頭を撫でた。近くにいた乳児を抱いた貧しそうな母親にも、その頃は貴重なマニラで手に入れたミルクの缶詰、チョコレート類、残りのにぎり飯を「よかつたらどうぞ」と惜しげもなく与えた。母親は涙を流しながら何度もお辞儀を繰り返した。私は呆気にとられ呆然としていた。汽車に乗り込んだ途端、Sは無言で私に頂戴をした。私は苦笑しながら、弁当も、チョコレートも、缶詰も、砂糖も半分渡した。鳥栖駅で降りる彼の肩をそっとたたくと、寂しく見える顔で「さようなら」と言った。ホームに降りた彼は発車するまでずっとこちらを見ているので、私は胸が妙につまってきた。この時は何でもない時の別れと思っていたが、そのまま永遠の別れとなってしまった。

彼は名のとおった老舗の和菓子屋の長男であったが、同郷の詩人、北原白秋を慕い、殆どの詩を暗唱できた。白秋を語る時の彼の目の輝きは、今でも私の脳裏に焼き付いている。また粘土で作って見せるいろんな和菓子の形態は、あきれるほど美しく見事ですばやかだった。「生きて帰ることができたら、俺の菓子

を味わってくれよ」とよく語ったものである。

その後の彼について、同郷だったAが話してれたことがある。Sは復員後、幾年も経ないで精神障害者となり、座敷牢での悲運な生活を送る身となった。Sには許婚の人がいた。幾年も生還を祈り待ち続けたSの復員ではあったが、Sの両親がこのような状態だからと、涙ながらに婚約の解消を申し入れた。わが子の幸せをひたすら願う親にとって、仕方のないこととはいえ辛い胸中であつたらうと思われる。彼女は「この人は可哀想かあ、戦争でさんざん苦勞し、やつと復員したらこんなことになって」そう言つて大粒の涙をポロポロ流し、座敷牢の傍にしがみ込んで泣き続けたそうである。それから数ヶ月後、Sは一遍の詩を残して孤独な生涯をひそかに終えた。

戦後日本のすさんだ一時期の、世の片隅のひとつの悲しい出来事である。彼女はその後どのような人生を歩まれたのであろうか。何がSをこのような状態に追い込んだのか、私はあることが頭に浮かんだ。

昭和十九年九月、私たちの部隊も乗船した鴨緑丸が基隆港に接岸した途端「キーン」という金属質の甲高い爆音をさせて、米軍艦載機グラマンが来襲した。ふり仰ぐと、二十数機の黒い機影が急降下して、次々と基地の建物に小型爆弾を落とす、機銃掃射を浴びせ、再び反転して急上昇しては同じ襲撃を繰り返す。退船命令が下り、近くの山に退避した私たちにも容赦なく機銃掃射を浴びせた。グラマンが去った後は悲惨な状況であつた。多くの兵士が無残な屍となつていた。

この日を境にSは無口になつていった。繊細な神経の持主である彼にとつてこの出来事は強い衝撃となつたのであろう。再び基隆港を訪れた時、山の中腹に供養塔を立て、あの日の犠牲者の冥福を祈つた。S

が手を合わせ、突如、自作の詩の朗読を始めて私たちを驚かせた。全員静かに彼の追悼の詩の終わるのを待った。

これらのことは、もはや遠く忘れさられた戦場のひとこまであるかもしれないが、Sの心中に深い傷痕となつて残つたに違いない。わたしたちの四囲には、このような過去を持ち、傷心を抱いて生きる人たちもいる。

花を飾つた中で燃え続ける大きなローソクの炎が在りし日のやさしかったSの姿と結びついて、門司港駅での戦災孤児への行動、あの基隆での詩の朗読が思い浮かび、声なき声が聞こえてくるようであつた。遠い日、拒むことのできない赤紙一枚で、家族と別れ、故国を後にした人々、毎年多くの人々から思い出してもらえぬ戦争の犠牲者もいれば、完全に忘れ去られた人もいる。

床についたのは明け方の四時をまわっていた。腹藏なく話し合える友人というのは、人生においてかけがえのないものだということを、強く感じたこの夜であつた。焦土と化した日本が、これほど豊かな社会を実現しようとは、あの焼け跡に呆然と立った戦友の、だれが予想できたろうか。

翌朝、朝食をすませた後、窓の外を見ると、観光客を乗せた川下りのどんこ舟が行き来し、白い鷺が一羽、川の浅瀬に考え深い様子で立っているのが見える。とても生きては帰れないとあきらめていた仲間が、柳川の地を集い、黄ばんだ写真を見るような思いで、かつての戦場や戦友を偲んだ静かな朝のひとときであつた。

十時過ぎにフロントに行くと、思わぬことに出会つた。かなりの高額になると思われるSの席代を、支

配人が「頂けません」と言うのである。「お気持はありがたいですが、そのようなご迷惑はかけられませ  
ん」とMと押問答をした。あの席の事情を知っていたらしい支配人は一歩も引かなかった。それで戦友九  
人、姿はないがSを含めた十人は、フロントの前に横一線に並び支配人に向かって静かに深く頭を下げた。  
目をうるませた支配人は「この度は皆さんの思いやり、やさしさに触れ、いい思い出になります。私の勝  
手な言い分を通して頂き、ほんとうにありがとうございます」と言い丁寧なお辞儀を返した。言葉は短  
かったが感動の気持が込められていた。

柳川を去るにあたって、キラリと輝く、さわやかな人の温かみに触れ、胸にこみあげてくる感動を抑え  
きれなかった。心地よい余韻を残して支配人は階上へ去って行った。

振り返ってみると、過ぎし五十年の歲月の中、さまざまな出会いと別れがあり、記憶に残る思い出も少  
なくない。次回の集まりは、台湾の人たちの人情に心打たれた思い出の地、台北ということになった。

いつものことだが、別れが近づくと、集まった時の元気は失せ、みんな寂しそうな顔になる。年長のF  
がしきりに目をこすっている。「台北には行きたい。しかしそれまで俺は生きとるかなあ」と心細い声を  
出した。体力の衰えが目立ってきたF、無情のようだが、大丈夫とは誰も言えなかった。最後に「元気で」  
と声をかけたら、うなずいて振り向いた横顔が寂しすぎて、私は胸が熱くなった。

生涯忘れることのできない思い出を心の奥に刻み込んで、ホテルを出ると、柳川の秋空はどこまでも青  
く美しく、そして高かった。



